転生者がよう実の世界に行くだけの話

氷冬流

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

天才は凡人に理解されないまさにそのとおりだとぼくは転生して初めて知った

オリ主（オリ主はＩＴ系の天才です！）

神様能力（神様特典）

１　視力２．０

２　ハッキング能力

３　原作知識（だだし８巻まで）

４　武才

５　第六感

目　次

1話　死亡、そして転生 ―― 1
2話　原作キャラとの邂逅 ―― 4
3話　仮面を被っている奴ほど胡散臭いものはない ―― 6
4話　自己紹介 ―― 10

1話　死亡、そして転生

突然だが僕は天才である。そのため大抵のことはなんでもできる。
子供の頃から研究所に入り浸り、学者として活動し、ノーベル賞を受賞、その後、様々な偉業を達成した。
そんな僕のダダ一つの趣味が小説（ライトノベル）を読むことである。
「あ～だんまちもよう実もおもしろいな～……」
「さてと、あと何年生きられるだろかな～」
そう、若き天才は早く死ぬ。
僕はだんだん衰弱してきている。医者にもあと数年と言われた
そのため、学校にも行ったことがない
友達なんていない（強いて言うなら本が友達）
だから死んでも後悔しないようにやりたいことをやっている
「あ～死にたくない。できることなら普通の人生、いや普通の学校生活を送りたかった。アハハハ。
次の人生、来世に期待ってところかな。頑張って来世の僕。
……」

気がつけば白い空間にいた
ここはどこだ？夢か？なんだここは？ここはいったい？
すると目の前にこどもが現れ
「ようこそ!!!転生の間へ！」
・・・は？
「やぁ！ぼくは世界の神の一柱！転生神セル！素晴らしい才能を持ちながら若くして亡くなった君に新しい人生！つまり！転生するチャンスをあげよう！」
・・・なんなん？え？なんなん？
「あれ～？反応が薄いな～」
「話を聞いていた限りじゃ、僕はちがう世界に行くのか？」
聞き間違いか？ホントか？
「うん！そうだよ！君を次の三つの世界の中から1つ選んで転生させてあげる！
マジか・・・
「その3つの世界はなんの世界なんだ？」
「うん！いい質問だね！転生する世界は『ありふれた職業で世界最強』か『転生したらスライムだった件』、『ようこそ実力至上主義の教室へ』の3つだね」
「よう実でおねがいします」
「そ、即答だね・・・」
当たり前だ。戦う世界なんかに行きたくない
「じゃ次は特典だ君には特別に5個あげちゃう！」
多くないか？いくらなんでも
「ふふふ、多いと思った？それほど君に期待しているんだよ」
へ～神さまにそう言われるとなんか照れるな
「さぁ！決めて！」

どうしようかな?・・・・

「こんなのでいいの?まぁいいや。あ!ちなみにここで起こったことは忘れるように設定したからね～」

するとセルはおもむろに手をひろげ

「さぁ!!これから転生する選ばれし少年○○よ!!新たな人生を存分に謳歌し、神の期待に答えて見せよ!!じゃよろしく～」

こうしてぼくは転生していった。

「あ、神の試練ってやつがあるからクリアしてね。しないときついお仕置きが待ってるから」

「え?」

どうなる?主人公!!

2話　原作キャラとの邂逅

転生して数年がたった。
え？説明が簡単すぎる？めんどくさいと言っていた作者に言ってくださいよ、作者に
まぁざっと説明すると
1．赤ん坊からリスタート！
←
2．天才とチヤホヤされて
←
3．痛い目にあって
←
4．問題を起こして
←
5．今ここ！
いや～長かったここまでいろんなことがあったけどよくここまで来れたと思うよ。とそんなことを思いながら本を読んでいます
前世ではロクな人生を歩まなかったから、
今世こそはいい人生をあｙ「あの、お隣よろしいですか？」
「え？」
顔を上げると銀髪の少女が話しかけて来た
「ですから、お隣よろしいですか？」
「あ、はい」
そう言うと銀髪少女は席に座り
「申し遅れました。私の名前は椎名（しいな）ひよりと申します。貴方は？」
銀髪少女は椎名（しいな）ひよりそう名乗った
「え～と僕の名前は蒼影湊（あおかげみなと）と言いますよろしく」
「はい、よろしくお願いします、蒼影君。ところで蒼影君は本が好きなんですか？どのようなジャンルが好きなんですか？好きなジャンルがないのでしたらミステリーはどうでしょうか。私は特にシャーロック・ホームズシリーズが好きでしてこれぞミステリーの傑作、名

作というのではないでしょうか！他にもｙ「ストップ、ストップ、ちょっと待って」む、すいません。どうも本の話なると熱くなってしまって、周りにあまり本を読む人がいなくてすいません」
やべぇ早速椎名ひより（原作キャラ）に会っちゃたどうしよう。まぁまず質問に答えるか
「大丈夫。質問に答えるね。本は好きだよ！ジャンルはそうだな～割と全ジャンル読むよ、でもあんまり昔の人のは読まないかな、まぁ、ライトノベルとかを中心的に読んでるよ」
「そうですか、私はその手のものはあまり読んだことが無いので少し興味がありますね」
椎名さんってラノベとか興味あるんだ…
「そうなんだ、良かったら貸そっか？」
「いいんですか⁉」
「うん、いいよ！貸すとなるとそうだな…ミステリー物で好きなのは忘却探偵シリーズだな～」
忘却探偵シリーズは主人公、掟上今日子の探偵シリーズである
忘却、その名の通り彼女は　寝てしまえば記憶が　一日前にリセットされるという最速にして忘却の探偵、そんな主人公が事件を解決するという話である
「それ、私も読みました！面白いですよね、なんといっても設定が一度寝ると記憶が消えるだなんて斬新な設定あまりありませんよね。」
「だよね。トリックも推理もいつも驚かされるよ、忘却探偵だからこそできることだよね」
このあとも椎名さんと小説について話を弾ませていると「席を譲ろうと思わないの⁉」
女性の声がバス内に響いた。
おやおや？何か始まるらしい
声の響いた方を向くとどうやら金髪の制服を着た男性とＯＬ　の女性が言い争っていた
「そこの君⁉お婆さんが困っているのが見えないの⁉」
あっこれバスイベントだ…

3話　仮面を被っている奴ほど胡散臭いものはない

え～と……バスイベント？どんな感じだったっけ？
確か～「君だよ！君！ここにお婆さんがいるのが見えないの!?」
???「実にクレイジーな質問だね～レディー」
お！あれはよう実のキャラが濃い中での一番の変人高円寺　六助だ！
高円寺「何故この私が、老婆に席を譲らなければならないんだい？理由があるとは思えないが」
ＯＬ「君が座っている席は優先席よ。お年寄りに譲るのは当然でしょう？」
高円寺「ハッハハハハ！実に理解できないね～優先席は優先席であって譲る義務もまたしては法的責任は存在しない。
よってこの席をそこの老婆に譲るかどうかは私が決めることであり、レディーが決めることではないのだよ。実に理解し難いナンセンスな考え方だ」
まぁ理には適っている、優先席とは言うが「専用席」とは言わない。あくまで「優先」であって、別に強制ではない
そこに社会的義務や法的責任はない、だから彼の主張は正しいのである（多分）
まぁ普通の人は言われたらどくけどね～
さすが、高円寺六助と書いて高円寺六助（唯我独尊）って感じだよ

そんなことを思っている間に女性と高円寺六助との口論は激しくなっていき…
お婆さん「ありがとうございます。もう大丈夫ですから」
お婆さんが申し訳なさそうに言う
高円寺「フハハハハ、どうやらご老人のほうが物分りがいいようだ、では存分に余生を満喫するがいいさ、ハッハハハハハ」
高円寺の一声で終わりそうだったとき！やつは現れた
???「私もお姉さんの言う通りだと思うよ？」

そう!!やっこそ、ょう実の世界における承認欲求　の塊、場合によっては仲間をも排除しょうとするイカレサイコ

その名も………櫛田桔梗である」

椎名「さっきから何をブツブツ言っているんですか?後、誰に対して話しているんですか?」

蒼影「あぁ、ごめん色々考え事をしていたんだよ」

おっと、どうやら声に出ていたようだ

そんなことを話しているうちに進展があったようだ

櫛田「すみません、この中で誰か、席を譲ってくださいませんか!?」

バス内がシーンと静まりとんでもない空気となるしかし櫛田は諦めず声をあげる

櫛田「お願いします!どうか譲ってくださいませんか??」

するとこの空気に耐えられなかったのか、見知らぬ女性が「あの!私が退きますのでどうぞ座ってください」

櫛田「ありがとうございます!!お婆さん、席が空いたから座って」

お婆さん「ありがとうね、お嬢ちゃん」

ブー

ん?どうやら到着したっぽいな

蒼影「椎名さん着きましたので降りましょうか」

椎名「はいそうですね。降りましょう」

…………………………

…………………………

………………………

……………………

…………………

………………

…………

………

……

…

蒼影「ここが」

椎名「高度育成高等学校ですか、」
；高度育成高等学校；；
東京の埋立地にある日本政府が作り上げた、未来を支える人材を育成する全国屈指の名門校。希望する進学、就職先にほぼ１００％応える学校。
３年間外部との連絡は断たれ、学校の敷地内から出るのは禁止され、寮生活になるが、６０万平米を超える敷地内は小さな街になっており不自由なく過ごせる楽園のような学校……
感じだった気がする実際問題こういう細かい部分的はうる覚えでよく覚えてない。
蒼影「じゃ行こうか！」
椎名「はい、行きましょう」
こうして”高度育成高等学校；；へ足を踏み入れる
クラス表へ向かうと
椎名「蒼影くんは何組でしたか？」
蒼影「え？え～とＤクラスだな」
すると椎名さんは「そうですか…私はＣクラスですので離れてしまいますね」としょんぼりしながら言う
それを見て僕はあまりの萌えに「グハッ」と吐血した（フリ）
椎名「大丈夫ですか!?」
蒼影「うん、大丈夫、大丈夫。まぁクラスが違くても遊びに行くよ」
椎名「はい、ぜひそうして下さい。せっかくできたお友達を失いたくないので」
蒼影「それじゃあ、椎名さんまたあとで」
椎名「はいまたあとで」
こうして僕の学園生活は幕を開けた
…
…
…
…
おっと、まだこれをみんなに言っていなかったな

「人は平等であるか否か」

答えは否

ただしチャンスは誰にも平等に転がって来る。

僕はそう考えている。

4話　自己紹介

廊下を歩いているとなんだか嫌な視線を感じる
周囲を見渡すと天井にしかも分かりづらい所に黒い何かがある
(あれは監視カメラか?すげぇ、全然わかんなかった)
そんなことに関心しながら教室に行くと速すぎたのか数人しかいない
(え~と俺の席は窓側のか後ろから2番目か)
席に座り周囲を見渡す
するとあるものを見つける
(やっぱりあった監視カメラ、廊下にもあったな
ここには4…いや5個か?結構あるな)
??「なぁ」
「ん?なんだ?俺になんか用か?」
??「俺の名前は綾小路　清隆、よかったら友達になってくれないか?」
……主人公じゃん、やべぇ主人公じゃん
「あぁ、蒼影　湊だ、よろしく、こっちも知り合いが誰もいなくて困ってたんだ友達になってくれないか?」
すっと手を差し出す
すると綾小路はめちゃくちゃ嬉しそうな顔をしながら
「ありがとう」と手を握ろうとした時
【新入生の皆さん、30分後入学式を開始いたします。生徒の皆さんは担当の先生の指示にしたがって体育館に集合してください】と可愛らしい女性の声が教室に響く
「「……」」
二人の間に気まずい空気が流れる
「スマン」
「いや、大丈夫だよ」
なんで今なんだよ!!!!(泣)
くっそー気を取り直して

「そういえば君は？」
「……それは私に言っているのかしら？」
心底信じられないような目で僕を見つめる
「うん、そう良かったら名前、教えて欲しいな」
「遠慮させてもらうわ必要性を感じないもの」
彼女はまるで外部との繋がりを断ち切るかのように即答した
いや、ヤベェな、初期の堀北ってこんな感じなのか……ツンデレのデレがないぞ……
「君がそれで納得するならそれでいいよ。さっきも聞いていたと思うけど、僕の名前は蒼影　湊。どうぞよろしく。」ニコ（^ ^）
彼女に対して僕は出来るだけ優しく微笑んだ
「……はぁ、堀北鈴音よ、よろしくするつもりはないわ名前も呼ばないでちょうだい」
「はい、よろしくお願いします堀北さん」
「呼ばないでって言ったでしょ？」ギロッと睨む
「はいすいません」
気の強い女子は怒ったら何をするか分からないからねすぐに謝ったほうがいいのだよわかったかね？みんな!!お兄さんとのお約束だよ？
そうしてクラスメイトとの絆を深めていくのでした」
「深められてないと思うぞ、そして誰と話しているんだ？」
「細かいことは気にしない方がいいんだよ」
「……おう（困惑）」
全く、綾小路君は何もわかっていないな……こういうのは気にしたら負けなんだよ

??「みんな!!せっかく一緒のクラスになったんだ!!自己紹介をしないかい？」
おや？このイベントは

「さんせー私たちみんなのことよく知らないしちょうどいいかも～」
そっか、自己紹介イベントか
さて、どうやるか…ネタに奔るか普通にやるか……
??「それじゃあ、まず僕からやろうかな!!僕の名前は平田洋介！洋介って呼んでほしい!!サッカーが好きでこの学校でもサッカーをやろうと思ってるんだ！よろしく!!」
パチパチと拍手が起こる
平田洋介、このDクラスにおいてこの先、リーダー的立ち位置にになる男だ。
この先もギャルや嘘つき、お調子者といった自己紹介が行われた。
途中、赤髪のヤンキーキレて教室を出ていったがこの先も自己紹介は続いていった
そしてついに彼の番が……
綾小路「えーー綾小路清隆です。えー……趣味は特にありません。あークラスの皆さん一年間よろしくおねがいします」
・・・・・・いや普通だな!!!!!!至って普通の自己紹介!!絶対に覚えられてないタイプの自己紹介!!!!!!
ほら!!本人を見なよ!!机の上で頭抱えちゃってるじゃん!!
平田「よろしく!!綾小路くん!!それじゃあ次!!そこの君、頼める？」
ああ、次は僕の番か、よし！
「僕の名前は……!!